歴史の交差点

武蔵野大特任教授　山内昌之

権力者の身から出たさび

2年間に総選挙が4回も行われた国、それが小党分立のイスラエルである。連立工作が失敗すれば、総選挙が繰り返される。今回ようやく成立する見込みの連立内閣は、8党合意によるが、国会（定数120）で過半数を1議席上回るにすぎない。最も議席数が多い党は中道のイェシュアティド（17議席）であり、中道の「青と白」は8議席にすぎない。右派のヤミナは7議席である。

いちばん少ないのは、イスラエル憲政史で初めて連立に参加するアラブ系政党・ラアム（4議席）である。他に、左派のメレツ、中道左派の労働党から、右派の「わが家イスラエル」や「新たな希望」など6議席か7議席の小党が連立に合意して、「変化ブロック」なる勢力が形成された。合意は反ネタニヤフ首相の一点である。

本来なら最大のイェシュアティドのラピド党首が就くべき首相は、ヤミナのベネット党首が就任する。ラピド氏は外相となる。これは政綱やイデオロギーが違うヤミナを連立内閣につなぎとめるためだ。無節操な野合といえばその通りだが、イスラエル政治ではネタニヤフ氏を通算15年間続いた権力者の地位から引きずりおろすのは、何事にも優先する政治目標だという考えも成り立つ。ラピド氏は「ゆきずりの野合」でなく「分別ある結婚」だと誇りたいところだろう。

ネタニヤフ氏は、汚職・詐欺・背任容疑の訴追と収監を恐れて、司法府を攻撃してきただけでなく、批判的なメディアの報道を差し止めてきた。また、入植地政策やガザ攻撃を私益のために使い、国民の命を危険にさらしたという批判も根強い。

「変化ブロック」は、法の支配の復活と汚職なき清廉な政治の遂行で一致したというのだ。ネタニヤフ氏は、ガザで休戦した「11日間戦争」でイランに援助されたハマスなどのイスラム過激派武装組織の武器サイト・司令部機能を破壊した。ファイザー社ブーラCEOとの談合による国民ワクチン接種率7割以上の達成（4月時点）など、国内政治で不利になる材料がなかったはずだ。連立工作失敗の原因は、組むべき相手がすべて敵になったからだ。

ラピド氏（元財務相）やベネット氏（元国防相・経済相）や、「わが家イスラエル」のリーベルマン氏（元外相・国防相）などは、もともとネタニヤフ政権の閣内で重きをなしたのに、閣外へ放逐された面々である。しかし、総選挙の結果気がつけば、ネタニヤフ氏が手を組めるのは、宗教系3党22人と自党のリクード30人だけとなった。過半数61にどうしても9票足りない。ラアムと異なるアラブ系統一会派6人はユダヤ人政党とは組まない。ネタニヤフ氏には「身から出たさび」かもしれないが、連立内閣の成立も国会で信任投票が済むまでわからない。何しろ、ヤミナはリクードよりもさらに右寄りで、パレスチナとの2国家解決案に反対し入植を徹底化する政党である。イスラエル政治では、何事も、起こりうる。

（やまうち　まさゆき）

Copyright © The Sankei Shimbun. All rights reserved.掲載記事、写真の無断転載を禁じます。